

選択課題3 人生の中で高校時代はどうあるべきか

次席

「時」を捉え、「時」を紡ぐ

宮台はびる

(東京都／私立富士見丘高等学校二年)

1. はじめに

「君がバラのために時間をついやしたからこそ、君のバラはあんなにたいせつなものになったんだ」(注1) サン＝テグジュペリの『星の王子さま』で、自分の星に一本しかなかった薔薇が本当は何千本もある普通の花でしかなかったことを知ってショックを受けた王子さまに、友達になったキツネがかけた言葉だ。

私はこの言葉でいつも、過ごす時間における「過程」を捉えるという視点を思い出す。その時間こそが尊いものだから「ついやした」時間も大切にしたいはずなのだ。しかし風呂の中でさえ腕時計を巻き、効率の良さばかり求めている私は、日々の「つ

いやした」時間に目を向けることなく過ぎてしまいがちだ。

本稿では「タイパ行動」についての考察から、「時」の「過程」という側面をとらえることの重要性和、その意義について探究する。「時」を軸に据えたその探究を通し、「人生の中で高校時代はどうあるべきか」ということを考える「時」を紡いでいきたい。

2. 「タイパ行動」の本質的意味を探る

アレクサンドル・コジュエーヴは『ヘーゲル読解入門』において、人間と動物の違いを欲望と欲求に求めた。東浩紀は『動物化するポストモダン』(注2)で、「人間は欲望をもつが、動物は欲求しかもたない

い。動物の欲求は他者なしに満たされるが、人間の欲望は本質的に他者を必要とする」というコジュエーヴの観点を援用し、ポストモダン社会における自己完結的なオタクの消費行動を「動物化」と説明している。東は動物化したオタクの消費行動である「単純に作品を消費するということでも、その背後にある世界観を消費することでも、さらには設定やキャラクターを消費することでもなく、さらにその奥にある、より広大なオタク系文化全体のデータベースを消費する」行動を「データベース消費」と呼ぶ。「データベース消費」では作品全体の物語・世界観ではなく、その構成要素自体を消費の対象にする。

同書刊行から二十年以上が経った。即物的に萌え要素を消費し、取り憑かれたように動物化していった世代と違って、オタク概念自体が一般に広く認められる今の世代に、「動物化」「データベース消費」は通用しないかのように思える。しかし、今話題の「タイパ行動」には通ずるものがあるのではないだろうか。

「タイパ」とは、「タイムパフォーマンス」の略語であり、「タイパ行動」は時間内に最大限の成果、満足を求めるという行動様

式である。映画や動画などにおいては、映像の再生速度を速める「倍速再生」や何かをしながら同時に再生する「ながら見」に始まり、映画を十分に要約した動画で内容を確認するなど、効率に重きをおいた視聴方法について用いられる。

「タイパ行動」をとる理由については稲田豊史が『映画を早送りで観る人たち』（注3）で、タイパ行動を「鑑賞ではなく、情報収集」と位置づけ、「観たいのではなく、知りたい」という新たな欲求が生じているためだと明らかにしている。映画を観るという行為が「作品の鑑賞」から「コンテンツの消費」へと変化しているというのである。次々とコンテンツを消費し膨大な情報を得るのは、その情報を他人に「シェア」し「あれ見た？」と問われたときに『見たよ』と応じて話題についていく（注4）という形で、コミュニティ内の居場所を獲得するためだと考えられている。

情報を他人に「シェア」するためだとすれば、今日の「タイパ行動」は他者を介せず欲求のみを満たす「動物化」した行動というよりも、他者を意識した「人間的」行動と判断する方が適切に思える。しかし、本当にそうだろうか。

「タイパ行動」では手っ取り早く設定の「情報」にアクセスするべく倍速視聴する。二十年前のオタク界限で交わされていた要素としての消費と、現代のシェアの道具としての消費には、どちらもコンテンツを「情報」としてしか扱っていない点で通ずるものがある。そのかぎりでは、「タイパ行動」というのは「データベース消費」のための手段だと考えられる。しかし、それだけではない。爛熟化した消費社会が進み、コンテンツの「データベース消費」のみならず、他者をも「情報」化した中で、自分の立ち位置や居場所の確保を求めているのだとすれば、「タイパ行動」は自分の心身の維持と安全を守ろうという動物的本能に基づいており、「動物化」した行動だといえないだろうか。

3. 身近に潜む「タイパ」の意識

そのような広い意味で「動物化」した「タイパ行動」の傾向は、高校生にも顕著に見られる。その傾向を見るに際して「推し活」を取り上げよう。「推し活」を取り上げるのは、「推し活」が高校生にとって一時の流行という側面を超えて日常となっているからだ。「推し活」という言葉は、元は「A

KB48」のファンが使っていた言葉だが、現在は自分が特に好きな物に関わる応援活動全般に用いる言葉である。

実際、LINEリサーチが高校生に対して行ったアンケート調査（注5）によると、高校生の七九％は推しが「いま、いる」と回答しており、特に女子高中生では九割近くが「推し」がいると回答している。また、「推しがいたことがある」という回答も含めると、女子高中生では九三％、男子高中生では七六％という驚くべき数となる。

それなしでは高校生の行動を語りえないといっても過言ではない「推し活」だが、そこでも「タイパ」は重視されている。フリーリース株式会社のZ世代の女子高校生・女子大学生を対象にした定点調査（注6）では、「前月の印象に残ったエピソード」として「学生イベント」を抜いて三ヶ月にわたり一位を獲得している「推し活」でも、「タイパ行動」が行われていることを明らかにしている。それは「推し」の数が多いから」というわけでもないらしい。同調査によれば、自身が最も応援している「推し」に対して、八〇％以上が「タイパ行動」を実施しており、そこでは「推し」の数とタイパ行動の比例関係は見られないという。

「推し活」においても、一つの動画という作品とともに「時」を過ごすより、手っ取り早く多様なコンテンツから情報を得るということが重要という場合があるのだろう。時間を忘れて熱中するはずの「好きなこと」においてまでタイプを重視するということとは、これも新しい消費行動として称揚されるのだろうか。

久保田進彦は「タイプバ行動」を「時短型」と「バラエティー型」の二種類に区別して分析している(注7)。「時短型」は必要に迫られて時間効率を高めている層で「時間がないから時間を大切にしたい人」を、「バラエティー型」は一定の時間内でより多くのモノを消費したり、楽しんだりしたいという層で「待ちたくない、今すぐ楽しみたい人」を指す。Z世代は「バラエティー型」に多く、「時間に追われているのではなく、自分の時間を一杯楽しみたいのが特徴」で「今を楽しむ欲張り消費」だとしている。そして「時短型」と「バラエティー型」という型に共通して「時間が惜しい」という感覚があるという。

先にみたように「タイプバ行動」で膨大な数の情報を得るのは、その情報を他人に「シェア」し、コミュニティ内の居場所を獲得

するためであった。たしかに、居場所を得て「今を楽しむ」ことができるのなら、これも時代に適した革新的な行動様式の一つだと捉えることも可能かもしれない。

しかし「タイプバ行動」は「人生」というベースで考えたとき、決して称揚されるべきものではない。なぜなら「無駄」と排除される時間自体が「自分の時間」を目一杯楽しむことを叶えるものであって、「タイプバ行動」という行動形態は時間という概念、ひいては人間の存在自体の価値を貶めるものとしてしか起こり得ないからだ。まずはサンデルの論を発展させ、その価値について検討したい。

4. 「時間」に働く市場の論理

マイケル・サンデルは「それをお金で買いますか―市場主義の限界」(注8)の中で、市場が非市場領域まで拡大することに警鐘を鳴らす。利他精神で構成された非市場領域の中でそれまで通用していた道徳的規範が、市場の論理に侵食された結果腐敗・墮落し、その本質としての道徳的・市民的「善」を人間の心の中から追放してしまおうと指摘している。

サンデルが述べるような金銭によって金

銭以外の価値が追放される市場の論理は、「物事の他の側面に目が向けられない」ということが生じる危険が根底にあると考えられる。そしてこの「物事の他の側面に目が向けられない」ということに起因する腐敗・墮落の構造は、金銭以外にも生じるのではないだろうか。

これについて私は、その市場の論理が「時間」にも働くのではないかと考える。「タイプバ行動」においては鑑賞の時間に対し、「分かりやすい情報を得る以外の価値を排除する」という形で市場の論理が働いているのではないだろうか。「タイプバ行動」では作品を味わい、考えを巡らせていくはずの鑑賞の時間は「他人にシェアできるような分かりやすい情報を得る」ことの邪魔をするだけの時間になる。しかし人間の生は時間の中にあるものだ。時間が無駄だと判断し、排除するならば、人間の生までもが無駄だということになりかねない。そう考えれば「タイプバ行動」が時間の本質的価値を腐敗・墮落させているといえるだろう。

5. 「時間」が築く私たちの世界

次に、目的と手段の観点から検討しよう。先に述べたように、「タイプバ行動」は「デ

「タベース消費」のための手段になっていたが、それはどういう意味を持つのだろうか。

ハンナ・アレントは『人間の条件』（注9）で、「目的とはまさに手段を正当化するもののことであり、それが目的の定義に他ならない」と、目的を定義した。そして「目的は必ず手段の正当化をもたらし、手段の正当化は必ず何らかの犠牲をもたらす」とを指摘した。これは目的と手段が連関したメビウスの輪的な状況が、犠牲をもたらすという危うさを伝えている。國分功一郎は、『目的への抵抗』（注10）の中で、このアレントの議論を認めながらも「目的合理的な活動は社会から絶対になくならない」とした上で、たとえ「活動が目的によって駆動されるとしてもその目的を超え出ることを経験できるところに人間の自由がある」と述べている。そして目的合理的に始まった行為でも、結果として充足感を得ることは自分にとっての自由の体験であると論じる中で、「遊び」が、「目的によって開始されつつも目的を超え出る行為、手段と目的の連関を逃れる活動」であるという。「タイパ行動」において、鑑賞に伴った時間はコンテンツの「情報」だけ抜き取る

という目的に対しての「手段」として扱われ、情報と直接関係ない時間は無駄や障害として犠牲になる。その犠牲になる情報以外の時間というのは、本来はコンテンツの作り手の意図、こだわり、息遣いを感じ取る時間でもある。ここで「タイパ行動」の根本的な問題が浮上している。「タイパ行動」は、目的を超え出ることを経験することそのものを排除する行動様式なのだ。すなわち、「タイパ行動」では「遊び」という活動は生まれることはなく、「手段と目的の連関」を逃れることができないということだ。「タイパ行動」において目的を超え出ることがないということとは、行為者が「物事の他の側面」としての過程やその背景に目を向けるということを避け、「シェア」できる簡単な描写しか受け取らないために、時間という複雑さを拒否するようになっていかざるをえないことを意味する。しかし複雑さを受け入れるということは他者と生きる上で不可欠だ。複雑なままそれを享受することで、他者の価値観にも目が向けられるようになる。映画鑑賞や推し活のような「遊び」を「タイパ行動」的にしか行えなくなったとき、時間が持つ「他でありえた」複雑さ、可能性というものを

認められなくなってしまうのではないか。もしも「タイパ行動」に支配され尽くしたとしたら、その先にあるのは、他者の価値観を理解することができない世界だろう。

源河享の『感情の哲学入門講義』（注11）では、感情には「知識や思考が反映」されていて、感情のコントロールに重要なのが「違う価値観もあると理解すること」だと述べられている。他者の価値観に目を向けず、感情のコントロールが利かないままでも、ひとりであれば生きていけるだろうか。

鷺田清一は『想像のレッスン』（注12）の中で、「わたし」の生は他のだれかとの関係につねに組み込まれている」と指摘した。誰かとともに生きる私たちは、ひとりで生きていくことはできない。生きる中で他者の価値観に目を向けていかなければならないが、それは必ず「時間」を要する。鷺田は「訴えあいのプロセス、議論のプロセスが『尽くされて』はじめて開けてくる道」があつて、「相手がじぶんと同様、土俵から降りずにおなじ果てしない時間を共有してくれたことそのことにふと思いが及んだ後にしか、納得は生まれない。そこではともにがき苦しんだその時間の確認」が大きな意味をもつという。「じぶん

の人生に納得するというのもおなじで、そういうものがきや苦闘の時間をじぶん相手に確認できるかどうかにかかっている」といって「時間」が築き上げるものの大切さを説く。「タイパ行動」で複雑さとともに他者を理解していく「時間」を持ってなくなつてはならない。

6. 人生の中で高校時代はどうあるべきか ——「記憶のてざわり」とともに——

川内有緒は「目の見えない白鳥さんとアートを见にいく」(注13)の中で、「人は『時』というものに抗うことはできないけれど『時』を宝物にすることはできるから」と述べている。同書は、著者が全盲の白鳥さんや友人の佐藤さんと日本各地の美術館を巡り、アートを「見る」ことで、自分たちの視点や感性を問い直す様子を描いている。最終章では「過去の記憶って思い返すたびに上塗りされているわけだから、どんな変わっていくわけじゃない? そういう意味では、自分の記憶だと思っているものは、常に新鮮な状態の『過去の記憶』じゃない?」という言葉から「時」についての話が展開される。白鳥さんは、幸せは「時間の中」にあると言い、そして「時間だから、それはとってはおけない。あとはその経験を自分がどれだけ信じるか、思い出して確かなものだって信じていけるかっていうことかな」と締めくくっている。

さて、人生の中で高校時代とはどのような時代だろうか。私は川内と白鳥さんの話を踏まえ、人生の中で「高校時代」は「過去の記憶」になった時も「新鮮」であるように更新され続ける時代だと考える。言い換えるならば、高校時代という時代の捉え方は、人生の中で変わり続けるということだ。

そのような更新され続ける「高校時代」ではどうありたいか。私は高校生として過ごす「今」を将来振り返った時、それが「宝物」だったと信じられるようでありたい。今の時点で捉えられる価値はたかが知れている。しかし「高校時代」という地点で、日々の過程を自覚的に捉えて過ごすことで、いつか振り返ったときに「高校時代」が人生にどう意味づけられるのかは大きく変容していくだろう。だから高校生である今は、自分が何を感じたのかをつぶさに掴みとる時間なのだ。川内は、友人たちと過ごしたそういった時間を「記憶のてざわり」と呼んだ。「記憶のてざわり」は時間の中で生

まれ、自分の中に刻まれることで、後から私を豊かにつくり変えることになるのだろう。

それらを踏まえ「人生の中で高校時代はどうあるべきか」に答えよう。人生の中で高校時代は、時間の中で「記憶のてざわり」となる経験を積み重ねる時代であるべきなのではないだろうか。

7. それでも「過程」を生きる「場」の経験を鍵に——

とはいえ、私も正直「タイパ行動」をしてしまっている。Netflixで兄弟とアニメを見ながら「なんか長くない? 飛ばそうよ」などと言ってしまったことは幾度となくある。しかし「タイパ行動」が肯定的に捉えられるべきものではないとも思い、こうして論じてきた。理想と現実の狭間で、矛盾した想いを抱いているのは、私だけではないはずだ。

では、日常の中で「タイパ」を意識してしまいがちなこの現代で、それでも時間の「過程」を大切にするにはどうすればよいだろうか。私は「場」が、「タイパ行動」の弊害から抜け出て、時間の「過程」に目を向けるための糸口となるのではないだろ

うかと考える。同書では、日本のあらゆる美術館を訪れる時間を通して、そこで「目が見えるひとも、実はちゃんと見えていないのではないか」という気づきや、ただ誰かと一緒に時間を過ごすことの喜びという価値が浮かび上がる。アートのある現地の場所まで赴き、美術館という「場」で鑑賞するそのとき、「タイパ行動」なるものの持つ危うさはかけらも浮かび上がってこない。アートを「見る」という「場」の時間の全てを堪能しているからだ。

自分勝手に時間を制御できない点に、「場」の経験の核心がある。そこでは「タイパ行動」は力を持たないのだ。「場」では必然的に「見る」ための視覚だけでなく、様々な感覚が刺激されることになる。それは目的を超えた「遊び」であり、「記憶のてざわり」となる。例えば、ライブへ赴くとき、動画では味わえない音楽や空気や人々の熱気、温もりを感じられる。「場」で時間と向き合って人々の息遣いを知る。そうした「場」で得られる感覚的な記憶は、時間の「過程」を豊かにし、捉え直すことを促す。「場」という空間の一定の制約により「タイパ行動」から解放される。私たちは「場」を通じて、自分自身や他者や世

界とつながり、新しい発見や感動を得られる可能性を持つことができるのではないだろうか。

8. おわりに

本稿では、「人生の中で高校時代はどうあるべきか」に対して、時間の中で「記憶のてざわり」となる経験を積み重ねる時代であるべきだと答えた。そしてその高校時代に「時」という「過程」の中で埋もれている気づきや価値に、「場」での経験を通して気づくことが「記憶のてざわり」を紡ぎ出す鍵となるのではないだろうかというのが結論だ。私たちは「場」における時間の中の経験を捉えることで、今この瞬間の楽しさとともにそれと同じだけの未来での気づきと、過去への気づきを生み出すことができるのだ。そうして私も将来、「高校生だった頃」を思い返したとき、記憶に「てざわり」を感じたい。

最後に、ミヒヤエル・エンデの名著『モモ』（注14）を思い起こそう。主人公モモが時間泥棒たちから時間を取り戻すこの物語を読む時間は、昔から私にとって大切な「場」だった。「光を見るためには目があり、音を聞くためには耳があるのと同じに、人

間には時間を感じ取るために心というものがある。そして、もしその心が時間を感じ取らないようなときには、その時間はないもおなじだ」。時間を節約するようになった『モモ』の世界において、人々の生活が徐々に「貧しく」「画一的」に、「冷たく」なっていることに、子供たちだけが気づいていた。なぜなら遊んでくれる時間のある大人が、「もうひとりもないくなってしまう」から。「時間とはすなわち生活なのです。そして生活とは、人間の心の中にあるもののなのです」。私が「時間」と向き合うようになったのは、思えばこの本との出会いが始まりだったのかもしれない。

この夏、生活の全てが本稿と共にあった。この日々はいつか読み返したとき、どう思いつくだろうか。ひたすら読み、学び、書くことと向き合い本稿とともにした「場」の時間、それは「記憶のてざわり」となって私の人生に、きつとかげがえのないものとして彩りを与えてくれるのだらう。

注釈

（注1）サン・テグジュペリ（著）石井洋二郎（訳）『星の王子さま』ちくま文庫、

二〇〇五年、一二〇頁

(注2) 東浩紀『動物化するポストモダン
オタクから見た日本社会』講談社現代新
書、二〇〇一年、一二六頁

(注3) 稲田豊史『映画を早送りで観る人
たちファスト映画・ネタバレ——コンテ
ンツ消費の現在形』光文社新書、二〇二
二年

(注4) 日経BizGate『映画を早送りする理
由とは 視聴スタイルに映る世相』映画
を早送りで観る人たち』[https://bigate.
nikkei.com/article/DGXZQOKC065V30
W2A600C200000](https://bigate.nikkei.com/article/DGXZQOKC065V30W2A600C200000) (参照 2023-08-10)

(注5) LINEリサーチ「いま、推しが
いる高校生はどれくらい? 推しのジャ
ンルや推し活事情を調査」[https://
lineresearch-platform.blog.jp/archives/
36260333.html#:~:text=参照 2023-08-10](https://lineresearch-platform.blog.jp/archives/36260333.html#:~:text=参照%2023-08-10)

(注6) フリユー株式会社「フリユー・Z
世代のトレンド調査 2022『推し活』」
[https://www.furyu.jp/news/2022/12/
Research/](https://www.furyu.jp/news/2022/12/Research/) (参照 2023-08-10)

(注7) タイヤモンド・オンライン「Z世代
はなぜ時間があるのに時短を求める。『タ
イパ消費』の実態」[https://diamond.jp/
articles/-/313255](https://diamond.jp/articles/-/313255) (参照 2023-08-17)

(注8) マイケル・サンデル(著) 鬼澤忍(訳)
『それをお金で買いますか——市場主義
の限界』早川書房、二〇一二年

(注9) ハンナ・アレント(著) 志水速雄(訳)
『人間の条件』ちくま学芸文庫、一九九
四年、三六〇頁

(注10) 國分功一郎『目的への抵抗』新潮
新書、二〇一三年、一四七頁、一九六頁

(注11) 源河亨『感情の哲学入門講義』慶
應義塾大学出版会、二〇一一年、二二八
頁

(注12) 鷺田清一『想像のレッスン』ちく
ま文庫、二〇一九年、一五九頁、一四九
頁、

(注13) 川内有緒『目の見えない白鳥さん
とアートを見に行く』集英社インターナ
ショナル、二〇一一年、三二五頁、三二
九頁

(注14) ミヒヤエル・エンデ(著) 大島か
おり(訳)『モモ』岩波書店、一九七六年、
二二一頁、九五頁参照

WIRED「東浩紀『動物化するポストモ
ダン』刊行から18年後の現在地を語る」
[https://wired.jp/series/away-from-
animals-and-machines/chapter11-1/](https://wired.jp/series/away-from-animals-and-machines/chapter11-1/) (参
照 2023-08-13)